

『new born 荒井良二

いつも しらないところへ たびするきぶんだった』展

関連ボランティア企画



あ、 あらいさん

私たちボランティアにとって、千葉市美術館での活動は毎回小さな旅をするような気持ちです。

ギャラリートークや鑑賞教育、ワークショップで多くのお客様と今日はどのような出会いがあるのか、毎回ワクワクドキドキします。

そして、展示室での多くの作品との出会い。

荒井良二さんの作品との出会いをそれぞれ自由に書き綴ってみました。
皆様どうぞ一緒に荒井良二さんの世界を旅してみませんか？



一人生を楽しむ達人！

まるでこの世の中の面白いことやワクワクするものを集めて散りばめたような会場です。色のキレイな絵本の中には、街や山、森、橋につながっていく道や窓から見えるさまざまな景色、今までどこかで見たような…例えば都会の街並み、ひろがる海、ゆったり流れる河なんかが描かれています。

眺めていると「この地球でいろんなものをつながりあって私も生きているんだなあ」なんて感慨深い気持ちになります。

この世界はキラキラして楽しいこと、優しいことであふれてるのですね、あらいさん！（M.S）

—知らない所を旅して出会った東北・山形

タイトル「new born=再生」には「bone=骨」とか、「ボン=踊り」のだけじゃれが隠れているとか。7階と8階の荒井良二絵本の世界を旅行中に、所々に飾られた「土偶とこけし」に出会った。私の知らなかった「東北・山形 荒井良二」の世界を感じた。

荒井良二の絵本を再び読みかえす旅に出ます。(Ma.S)

- ・「逃げる子ども！」
- ・「new born 旅する名前のない家たちを ぼくたちは古いバケツを持って追いかけて 湧く水を汲み出す」

—それぞれの場所へ

今日も子どもが逃げている。空から光と共に降ってくる、黒いカタマリから。目に見えないヘンな名前の物質から。時には、学校という、ぎゅうっと押し込められる四角い場所から、逃げる。

いろんな声が後ろから追いかけてくる。

「あなただけでも逃げて。」「きっと大丈夫。」「さあ、逃げて、逃げて。」

逃げるって、でも、どこへ？

キミは、他に行く場所なんてないと思うだろう。大人になった僕は、逃げる自由を手にした。だから、“ここ”ではない選択肢があることを、キミに伝えたいんだ。

さあ、行け！それぞれの家で生まれ、それぞれの家族がいる、好きな遊びもバラバラの、みんな。不安げな瞳を抱きしめる。今は、振り返らなくていいから。自由に、進め！幸福へ向かってー。

今日も全ての子どもたちに、出航の扉が開かれていることを、祈ります。(Mi.M)

—あらいさんいろいろ見つけた

1 黄色 太陽がオルガンを弾いて始まる朝は黄色い世界。青い静かな海を見守るかのような二本の木の生える黄色い丘。散歩中の親子やバスで帰宅する少女や少年、森や海の動物たちを照らす月は静かに黄色をおさめ夜を深めます。

2 バス 朝、太陽が昇って道を走る象バス。初めて一人旅をする少年が乗るバスは太陽から生まれた黄色いバス。砂漠の中の停留所で「トントんパットントントんパットン」の音楽と共に待つ旅人の前を満員で通り過ぎるバス。遠く遠くへと私達を旅に誘うのは道を走るバス。この道を私達はどこへ行くのでしょうか？

3 動物 ビヨーンと足が伸びて門柱のようになってしまったマンモス象。少年を乗せてどこまでも走っていく赤毛の白馬。朝の光の中で舌を出す犬。みんなみんな私達と共に旅をする仲間達。

4 山 朝の光のもと緑に輝く峰々。頂上にはっぴいさんが来る大きな石のある山。様々な色に彩られた峰々。峠の建物は山に生まれ山に暮らすヨーナのお店？旅人と語り合い旅の安全を願うヨーナ。旅を続ける私達は皆、ヨーナに見守られているのでしょうか。

5 子ども 空を飛び去っていく子どもたちを見ている少女。アコーディオンを弾く少年。滝のような涙を流す少女。

いろいろな車輪の付いた乗り物に乗って逃げていく子どもたち。逃げていい。泣いて笑って怒って。いつもたびするきぶんで。

それでいい。未来を生きる子どもたち。私達は皆、子どもを生きてきたのだから。(S.N)

[絵本の棚]

ボランティアがお気に入りの絵本について語ります。

「あさになったのでまどをあけますよ」

この作品を始めて見たのは2014年の「ブラスティラヴァ世界絵本原画展」だった。当時、子供達との絵画鑑賞は企画展示の作品で行っていた。開館前の会場をボラ仲間と見て回っていた。この作品は爽やかで軽やかでなんでこんなに明るいのだろうと記憶に残った。朝、窓を開けて見える風景。昨日の続きの今朝の風景。変わらない風景。明日も続くであろう風景。それが当たり前でないのはこの作品が2011年に描かれていることにある。東日本大震災。それは当たり前が当たり前でないことを我々に教え考えさせた。震災に遭っていない子供と一緒に見て、意味が判るのだろうかと考えた。

作者は絵本を「子供のもの」とか「大人のもの」とかという枠組すら無くしてしまうくらい自由なものと考えている。そこが、作者の絵本に向き合う時の立ち位置なのだと思う。(S.U)

「はっぴいさん」

とっても鮮やかでカラフルな色のかわいい絵本です。

こまったことやねがいごとをきいてくれる、でも会ったことがないというもはや都市伝説のような「はっぴいさん」に会いに行く男の子と女の子の物語が描かれます。

目にも楽しいけれど、実はHAPPYなことって私たちの身の回りにあふれているのかも…なんて気づかせてくれる素敵な1冊です。(M.S)

「こどもたちは まっている」

子供の頃、私はいつ出会えるかわからない何かを、ドキドキしながら待っていた。花火が上がるのを、種から芽が出るのを、空に星が流れるのを、待った。サンタさんも待った。けれどいつしか、待つことをしなくなった。引き寄せたいものがあれば、大人は努力し、近づき、それを手にするか、自らつくり出す。時には少し強引なやり方で。

でも、たまには子供のように、ただ待ってみるといい。きっとそれはやって来る。やって来ないかもしれないけど、何かを期待して待つ時間は特別だ。

心がざわつく時、この本を開いたら、波が引くように気持ちが静まった。大人になった心にも、待つことはとてもいいようだ。(Mi.M)

「きょうはそらにまるいつき」

空を見上げて丸い月を見つけるとなんだかうれしくなる。「あ、満月だ！」 夜なのに明るくて、ワクワクしてくる。今年のスーパームーンはとりわけ大きくて明るかったし8月は満月の夜が2回もあった。

荒井良二さんのこの本は、リズムのある言葉と手書き文がホンワリ感を醸し出し、親しみやすい絵とマッチしていて、すんなりとこの本の世界に誘う。海にも山にも人々が暮らしている町にも、大きくて丸い月は等しく夢と希望を照らし出している。お母さんに抱かれて月を見上げている赤ちゃんの可愛らしさには誰しもが魅せられてしまうのではないだろうか？(S.U)

「きょうはそらにまるいつき」

あかちゃんの瞳とおつきさまは似ている。どちらもときどき、黙ってじっと見ていたくなる。見ていると吸い込まれそうな気がしてくる。しんと静かかと思えば、時にはくるくと躍るように光る。絵本の中では、いろんなひとが、いきものが、つきとともにある。くりかえされる、荒井さんのやさしいじゅもん。「ごほうびのようなおつきさま」。ぽっと胸に灯がともるような、枕元にいつも置きたい、素敵な絵本です。(Me.H)

「きょうというひ」

雪の降った翌日、この日のために編んだセーターと帽子とマフラーを身につけ、女性はこの日を照らすろうそくを灯します。そして、このろうそくが消えないように小さな雪の家を作ります。今日の日の祈りを消さないために。

心が疲れたとき、この本の小さな雪の家と灯りを思います。心のどこかへ置き忘れてしまった祈りのために。(S.N)



千葉市美術館へバスの旅

千葉駅からバスで千葉市美術館へ小さな旅をしてみませんか？

バス停で一つ目か二つ目ですが・・・

美術館のHPでご案内しているバス路線（大学病院行きまたは南矢作行き）以外にも利用できる路線があります。

1、のりば8 駅東口階段を降りると正面がのりば7（病院行及び南矢作行）の右隣

千城台車庫行、御成台車庫行、市営霊園行乗車後、一つ目停留所（千葉銀行中央支店）下車。

バス停すぐ後ろの信号を渡り左折（セブンイレブンが斜め前にあります）そのまま直進し最初の信号（広小路交差点）を右折、直進し若葉郵便局の前を通り、信号を渡ると三つ目のビルが千葉市美術館 運賃100円。運行本数が多く便利です。

京成バス→ 路線バスから検索

2、のりば6 大学病院行きバスのりば7の左隣。ちばシティバス川戸都苑行き乗車後、二つ目停留所

（広小路）下車、向い側若葉郵便局。前方に美術館の建物が見えます。信号を渡ってお進みください 運賃100円。

青い車体に白抜きでcity busの文字がとてもおしゃれです。（白に青もあり♪）美術館に一番近い停留場で便利ですが、運行本数が少ないので乗れたらラッキー！

ちばシティバス→ 路線バス→ 星久喜線で検索

